

## ジェンダー平等の達成—女子学生のリーダーシップ能力の開発 ティリニ・ウィジェットウンガ（スリランカ）

私は地元の大学でおよそ5年間にわたり語学の講師をしており、高等教育を受けているスリランカのたくさんの若者と接してきました。

現在、スリランカでは、大学に入学する女子は男子の数を上回っていますが、ジェンダー差別はいまだに存在しています。私は、スリランカの防衛大学で講師として勤務していますが、こうした状況は、クラスルームのレベルでも目にします。女性より男性は「タフで強い」と、一般的に軍人は考えており、これは、新たに入隊した若者世代の頭の中にもすでに刷り込まれた共通の考えです。ほとんどの場合、軍隊に入る若者の大多数は男性です。軍隊のレベルでは少数派の女性は、いわゆる「より強い性」の支配を受け、さまざまな機会に虐待を受けるケースもしばしばあります。



将官の大多数は男性です

ほとんどの場合、男子は「軍事訓練の間、男性が受けなければならない身体的訓練や罰則、さらには、肉体を酷使する任務は、女性より厳しい」と考えています。このため、男子は、女子に対して過度なねたみや嫌悪感をおぼえるようになるのです。その結果、防衛大学のクラスルームのレベルとなると、当然のことながら、女子は、憂うつや混乱を感じながらも、静かに口を閉ざします。その一方、男子はあらゆるディスカッション、フォーラム、プレゼンテーション、対話型のセッションなどに参加するのです。

こうしたことは非常に痛ましい状況です。勉強がよくできる女子がクラスの中で控えめな態度をとり、自らの本当の才能を見せないように強要されているのです。その結果、自分の教育的目標を達成する能力は、男子より女子にあるというのに、女子には、自分の能力や創造性を存分に発揮することが許されないのです。

男性の支配は、大学レベルのアカデミックスタッフの間でも存在するように思います。防衛システムに関する意思決定のレベルにおいては、男性の将官が大多数を占めるので、さまざまな方法で、女性スタッフを搾取する傾向にあります。その結果、男性のみが余暇を存分に満喫し、一方、女性は常に懸命に働くばかりです。

一般の大学の場合、女子は、学術以外の活動にはあまり参加しないようです。そのため、男子に比べると、課外活動に参加する女子は非常に少なく、大学内で設立されているさまざまな会でリーダーシップをとるのは男子だけです。こうした状況は、他の高等教育機関（技術学校や専門学校）にも見られます。考えられる理由として、私たちの社会に深く根付くジェンダーに基づいた態度や価値観が挙げられます。



授業中の防衛学校の生徒たち—女子は前には座りません

スリランカの家系の価値観では、女子は暗くなる前に家に帰らなければなりません。帰らなければ、両親が非常に心配し、その両親と子どもの双方の気持ちに多くの問題やフラストレーションが発生することになります。その結果、授業が終わった後に行われる活動のほとんどについては、女子の参加率がかなり低くなります。

また、社会に広がる社会的および政治的プレッシャーによる学生のコミュニティーの混乱を理由として、大学を中心とするスリランカの高等教育機関は、今日、騒然とした環境にあります。一般的に、大学生は、社会において教育を受けた若者の中で、最も優秀な存在とみなされます。というのも、大学生は、競争が非常に激しい試験をくぐり抜けて、大学の入学許可を得ているからです。大学に入学すると、学問を追求しながらも、多くの難題に直面します。こうした難題が生じる理由としては、各個人の社会および経済的バックグラウンド、また、文化的小および因習的なしつけなどが挙げられます。

この国の政治的バックグラウンドもまた、大学に入った学生の振る舞いに影響を与えています。この種の社会的問題により、時に学生は、自分たちの間には大きな社会的な差があると感じます。よって、大学内で生徒の個々人が平等に扱われる環境を構築しようとしています。この目的のために使用する手段が「悪ふざけ」です。新入りが大学に入ってくると、上級生はまとまって、さまざまな方法で新入りに悪ふざけをします。大学の新生を苛酷な方法で扱うことすらあり、この場合、性別は関係ありません。

同様に、学生の権利を擁護する学生自治会でも、リーダーシップをとるのは全て男子です。こうした自治会の中には、政治的な関わりを持つものもあります。学年を通して大学でリーダーシップのポジションに就いた男子は、自分のリーダーシップの能力を伸ばし、大学を卒業した後も、リーダーシップを発揮するポジションに容易に就きます。こうしたケースは、女性にはあまり見られません。明らかに、現在の政治のリーダーの大多数は、大学の学生協会や自治会で役職に付いていた人びとです。ジェンダー不平等の存在がこうした状況を引き起こしており、この状況の改善にむけての道はまだ遠いのです。

よって、スリランカのような因習的なアジアの国々においては、女子は同僚や社会から差

別を受けることは明らかです。伝統的なしつけ、保守的な規範、および社会的な習慣により、この国の教育を受けた世代の女性が生まれました。さまざまな活動に参加し、正義のために闘い、教育を通して国の発展に進んで貢献する才能、能力、やる気があっても、彼女たちが一切の障害なく成功を収めることができるのかどうか、疑いが残ります。

世界初の女性の首相とアジア初の女性の大統領は、共に、スリランカ出身であり、現在では、多くの女性が意思決定に参画しつつあります。しかし、政治の場に初めて登場する際には、今なおジェンダーに基づく差別や世間の失礼な認識に直面し、政治関係者の冷笑にさらされます。

ジェンダー差別は、雇用の分野にも存在します。社会には今も、女性は「弱い性」であり女性には体力や肉体労働が必要な仕事は無理だ、との考えがあります。男性と女性の生物学的違いを考慮した仕事の公正さを理解していない人が、大勢います。女性がいくら教育を受けたところで、ジェンダーのステレオタイプにより、その女性は社会から見下されるのです。